

國學院大學學術情報リポジトリ

〔紹介〕 小島瓊禮著『猫の王 猫伝承とその源流』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯倉, 義之, likura, Yoshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001481

紹介

小島瓊禮著

『猫の王 猫伝承とその源流』

飯倉義之

本書は一九九九年、まさに世紀末に刊行された「猫」を主題とする民間伝承・民間説話を集大成した猫づくしの一書の文庫化である。という、巷の猫ブームをあてこんだ本のように思われるかもしれないが、本書は日本の猫伝承を中心としつつも、時間的には古典から現代まで、空間的にはネコの原産地に近いエジプトからヨーロッパ、西アジア、東アジアを経由して日本までと、猫に関する伝承を限りなく正確に博搜して、猫伝承の人類文化史を編み上げている。

そもそもネコは日本列島に自生していた動物ではなく、北アフリカ・中近東に生息していた野生のリビアヤマネコが家畜化され、イエネコとなってから交易と共にユーラシア大陸の東へと運ばれてきた生き物である。そこにはおのずから地球規模の文化の接触と変容が発生してくることとなる。

それと同時に生物としてのネコの不思議さもある。特に群を

作らない単独生活の肉食動物であるはずのネコが、人間の目の届かないところで「集会」を開くという習性は、人間の知らないところに猫の社会があるのではないかという習性は、人間の知らないところ。それがヨーロッパの「猫の王」伝承であり、日本の「猫山」「猫岳」「猫又屋敷」伝承となっていく。他にも魔物としての猫、猫の踊り伝承、ネズミ除けの猫絵、猫の魂など、人の生活に密接に関わり合い、人に懐いたようにいながらも、野生や魔性を秘めた二面性を持ちつづける猫の伝承を、本書は豊富な資料を挙げて丹念に記述し解き明かしていく。

また学術書の文庫化に際しては、手に取りやすさを考慮して注や参考文献が採録されない場合が散見される。しかし本書では、一般読者には閲覧が困難であろう洋書であっても略することなく採録されている。このことひとつとっても、二十世紀末に刊行された本書が約四半世紀を経た現在にも学問的な意義を持ち続けていることは疑いない。手に取りやすい文庫となった再刊したことは今後の民俗学の発展により一層寄与するものであるはずだ。

だが、評者が凄みを感じたのは本文よりも巻末の「あとがき——『猫の王』と私——」だ。著者の小島瓊禮氏は一九三五年生、高校時代から民俗学を志し、國學院大學で大学院博士課程

を満了された。その間、柳田國男らの郷土会が行なった、相州内郷村調査の中心人物だった鈴木重光が指導したガリ版刷の民俗研究誌『鮎人』(一九五三〜五五)、『ひでばち』(一九五六〜六二)に参加し、一九五四年の相模民俗学会の創立にも参加されている。⁽¹⁾ その後は長く琉球大学で教鞭をとられ(現在名誉教授)、退官後は本学大学院でも講義を行われた。学会・大学の学術誌への論文発表や単著の執筆と並行して、『比較民族学会報』などを刊行され、手元からの発信も常に続けられていた。まさに戦後民俗学と共に歩み、世界規模の比較研究を志し続けた碩学であり、学史を体現されている存在と言って過言ではない。

本書の後書きではその小島氏が、卒寿を前に学問に志した当時の回顧から大学院修士課程時代の学問形成の過程、そして今後の学問的展望を簡潔に、しかし力強くまとめられているのである。岩波文庫の関敬吾訳、カールレ・クロン『民俗学方法論』や柳田國男監修『日本伝説名彙』がいかに読まれたのか、ステイス・トンプスン『口承文芸のモチーフ索引』がどのように移入されたのか、ドイツ民俗学がどう受容されたのか、あとがきの短い文章でも時代の空気がありありと伝わってくる。

研究者の本分は学び続け書き続けることであるという気概が

本書には溢れている。すべての学問を志す学生に、とりわけ本学の学生にぜひ読んでもらいたい一冊である。

(1) 鈴木通大「柳田國男と神奈川の民俗学研究(特)―郷土会の相州内郷村調査を中心に―」『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』第一七号、一九九二年

(文庫版、五四四頁、KADOKAWA、二〇二四年四月発行、
定価一七四〇円＋税)